

第2章「子どもたちの学ぶ力を育てる」、第3章「学習活動を構想・実践する」

テキスト：『問題解決学習入門』藤井千春、学芸みらい社、2018年

奈良教育大学 中澤 静男

本書は問題解決学習の入門書として書かれており、著者は問題解決学習は1学期に1単元ぐらいしかできないと述べているが、本書の内容は問題解決学習の場合だけでなく、日々の授業において生かすことができる内容である。第2章では子どもの学び方が述べられている。著者は「学びは、最終的には自分自身の生き方の再構成」と述べている。換言すればアイデンティティの確立ということであろうか。また、「子どもは対話の中で考えます。対話は「文脈性」のあるテーマについて、子どもたちが相互に「自分のことば」で語り合うことによって成立します。」と述べ、それを支援する教員の役割について第3章で詳述している。

この子どもの学び方やそれを支える教員の役割について、次の3点より考察する。1点目に「文脈」に関して、2点目に集団学習における構想について、3点目が評価についてである。

1点目の「文脈」についてである。本書では、「文脈性のある学習テーマ」や「文脈化して理解しようとする」といった使われ方をしている。文脈は多義的な言葉であるが、著者は「つながり」という意味で使用されているのではないか。文脈性のある学習テーマは、自分と関り（つながり）のある学習テーマと解釈すれば、子どもが熱心に関わる学習が展開されることが首肯できる。また文脈化して理解するとは、これまで体験したことを思い出して比較したり、置き換えたりといった「つなげて考える」ことで理解が促進されるという意味であろう。断片的な知識は、すぐに剥落してしまう。文脈化されることで知識は他の知識とつながり、学習だけでなく生活、人生において使える知識となると考えられる。

2点目の集団学習の構想についてである。著者は「この単元で育てたい子ども」を選定すると述べており、選定の条件を3つ示しているが、その前提に単元の展開を教員がルールを敷いて、それに乗る子どもを選定するというイメージをぬぐうことができない。著者自身は、「教師が予定に拘泥」することを戒めているが、柔軟に予定を変更することと子どもをあらかじめ選定することは、矛盾するのではないだろうか。子どもは独自の存在である。単元を通して他の子のモデルになる子を選定するよりも、その時その時にモデルになる子を他の子に紹介することで「学び方の良さ」を広げるのが効果的であろう。

3点目の評価についてである。子ども自身の評価として、「振り返り」のストーリー化を推薦しているが、発展途上の子どもにとって重要なのは、自己分析であろう。話し合いのときに発言したり聞いたりできたか、新聞づくりなどの作業学習では自分のよさを発揮できたか、見学やインタビューにも主体的に活動していたかなど、学び方の強みと弱みを自覚すること、つまりメタ認知力を育てることが子どもにとって重要である。また、著者は教員に対して、評価観の転換を求めている。著者は子どもの序列化や弱点を指摘するのではなく、「よさ（持ち味）・成長（努力）・可能性（発展可能性）」を自覚させ、伸ばすことが評価の本来の目的であると指摘し、学んだことがその後の生活の仕方に実現されることが重要であると述べている。つまり学び方の評価は子どもが自己評価し、教員は子どもの成長の方向性を見定め、支援するというもので、示唆に富む内容であると感じる。

以上のように、第2章・第3章には子どもの学び方とそれと相互関係としての授業のあり方が述べられており、それは問題解決学習の場面だけでなく、毎日の授業における子どもとの関わり方、子ども理解の仕方、育て方に関わる学校教育の中核が述べられている。ここに述べられている子どもの特徴を生かした授業を展開するために、教材開発や単元デザイン、評価方法などについても研究していきたい。